

平等な社会をめざして

市川三郷町立市川南中学校三年 鈴木 悠斗

「このテレビに出てる人って、男？女？」と小学生の時、私は母に聞いたことがある。テレビに映るその芸能人は、見た目や話し方、仕草は女の人っぽいのに、声は男の人だったのだ。私は、そんな姿が不思議ではしかなかった。すると、母から

「LGBTQって知ってる？」

と返された。(LGBTQ・・・) 今まで聞いたことのない単語が出てきた。母は何のことを言っているのだろうと思った。母は、

「LGBTQってね、性的マイノリティーのことなんだよ。」

と言っていた。また、聞いたことのない単語が出てきた。そこで、詳しく知るために、インターネットで調べてみることにした。

LGBTQは、性的マイノリティーともいい、性的少数者のことである。同性に恋愛感情をもつ人や、自分の性に違和感がある人など、体の性と心の性が一致しない人々の総称だという。世界では、十三人に一人の割合で存在するといわれているそうだ。私の生活で考えてみると、市川南中は、生徒が二十一人、先生が二十二名、合わせると四十三名、約三人が当てはまることになる。そう考えると、かなり高い確率だと感じた。しかし私は、今までそういった人たちに会ったことがないし、関わりを持ったこともない。もしかしたら、そうかもしれないと思いながら人と接したこともないので、気づきさえしていない。だから、そういった人たちのことが、まだよく分からないし、そういう人たちに対して偏見というか、違和感を持って接してしまうような気がする。テレビに出ているような芸能人は、見慣れているから、違和感なく受け入れているが、実際、私の家族や友達がそうだったら。私は、今までと同じように接することができるのだろうか。考えてみたが、自信はない。

そこで、なぜそう考えてしまうのか、過去をふり返ってみた。そして、一つの答えにたどり着いた。それは、小さい時から、そういうふうに育てられていたからだと分かった。親からは、基本的に青い服を着せられていたし、おもちゃはトミカのミニカーや戦隊ものや仮面ライダーばかりで遊んでいた。保育園でも、先生達に

「はると君、かっこいい！」

と言われたことを、なんとなくだが覚えている。その先生は同じ学年の女子には、

「○○ちゃん、可愛い。」

と言っていた。その時私は、男は「かっこいい」存在で、女は「可愛い」存在なのだと解釈した。そしてその部分を伸ばした者が、モテる存在なのだとも思った。だから、私は「かっこいい」を追求してこれまでも生きてきた。好きな色は、赤や青。好きなキャラクターは、仮面ライダー。得意なことは、かけっこやサッカーなど。とにかく、かっこいいを求めてきた。男らしいと言われることがうれしかったし、そうしなくてはいけないとも思っていた。また、そうすることが私は好きだった。私がそれらを選んで、そうしていたこともあっただろうが、そういうものなのだと思わされていたこともあったかもしれないと、今になって感じる。つまり、子どもの時の刷り込みや、大人が子どもにかける言葉遣いで、私たちはそう感じるようになってしまうということも考えられる。それに、私の両親は男女だ。周りの友達や親戚の親も男女だ。だから、私は男女で家庭を作り子どもを作る、という環境も、当たり前だと思って生きてきた。

そういえば、私が読んだ本の中に、かの有名なアインシュタインの言葉が載っていた。

「常識とは、十八歳までに身につけた、偏見のコレクションのことをいう。」

この言葉を聞いて、私は深く納得した。人によって住む環境、与えられた状況が違う中で育つので、感じ方は人それぞれだ。常識だと思って身につけた知識は、もしかしたら偏見になることもあるかもしれない。そしてそれは、周りから見たら非常識なことだということもあるかもしれない。そう思うと、今まで私が感じてきたこと全てが、正しいわけではないことを改めて考えさせられた。私は、LGBTQについて、母から話を聞いたり、調べたりしていくうちに、この世には多くの性的マイノリティーが存在することを知った。ただ、私は男女でカップルになることが「普通だ。」と考える自分が、心の中にいる。まだ、多様性を受け入れられるだけの、心の広さを持っていない。私が十八歳になるまでに、たくさんの人や多くの経験に触れて、LGBTQの人々の気持ちを少しでも理解したり、自分にできることは何かを考えたりするコレクションを増やしていくことができるだろうか。私は、これからそれらを増やしながらか、いつかマイノリティーとかマジョリティーとか、そんな言葉さえもなくなるような、誰もが平等な社会になることを願う。そしてそれを作っていくのが

今の私の役目なのだと考える。